

1 2

知教連
(知多市)

○知 多 中 ヤマモトケイシロウ 南粕谷小 児島 一徳
八 幡 小 長谷川拓也 旭 東 小 近藤 友美
旭 南 小 鷹松 航 新 知 小 中野 多笑
佐 布 里 小 岡本さやか 知 多 中 石川 恵大
新 田 小 渡辺 純 旭 南 中 河合 紘志
岡 田 小 太田 直斗 東 部 中 石川 裕真
旭 北 小 若山 千紗 中 部 中 大須賀崇彰
つつじが丘小 竹内 泰子 東 部 中 國武聖志朗
八 幡 中 日浦 聡志

分科会番号 1 3

分科会名 能力・発達・学習と評価

自ら学び続ける児童生徒の育成 ～学びのつながりを可視化する授業づくりを通して～

1 主題設定の理由

現代は、グローバル化の進展や、AIなどの急速な技術革新等により、将来を予測することが困難な時代を迎えている。こうした時代を生きていく子どもたちには、未知の場面や状況でも、自らの課題を見つけ、他者と協働しながら、課題解決に向けて主体的に判断したり、自らの考えを表現したりする力が求められている。そして、社会に出てからも同様に、生涯にわたって学び続ける姿勢が必要である。

昨年度知多市では、「学び続けることができる児童生徒の育成～学習を自己調整できる振り返り活動を通して～」という研究テーマで、主体的に学ぶ児童生徒の育成に焦点を当て、研究を進めてきた。そこでは、振り返りの視点を明示することが、児童生徒の記述を具体化し、思考を深める手助けとなることや、振り返りを継続的に行うことで、児童生徒は自分の課題に気付き、学習に見通しをもって行動できるようになることが分かった。一方で、児童生徒の学習過程における「自分自身の変化」に関する記述が少なく、自己の変容に焦点を当てた振り返りや、振り返りで得た気付きを次の学習へとつなげる設計や仕組みを、授業の中に取り入れることが今後の課題として挙げられていた。

そこで本年度は、昨年度まで行った「振り返り活動」に加え、前時までの自分の学びや他者の学びが、自分の学習に「つながる」ような授業構想を目指す。自ら学び続ける児童生徒を育成するためには、自分自身で課題を見つけ、教材や人との関わりの中で自分の考えを再構築し、その結果、自身の成長や学ぶことの楽しさを実感できる授業づくりが必要である。そして、その活動の繰り返し、自ら学び続ける力を育てると考えた。以上から、本年度は「自ら学び続ける児童生徒の育成～学びのつながりを可視化する授業づくりを通して～」を研究主題に設定した。

2 研究の構想

(1) 目指す児童生徒像

学びのつながりを実感し、自ら学び続けることができる児童生徒

⇒「自ら学び続ける」とは、以下の2つの姿とした。

- ・課題の解決に向けて、「必要な情報」を得るために「誰と」（個人、ペア、グループ、教師）「どのように」（教科書、ノート、タブレット端末）学ぶか、学び方を選択している。
- ・本時の学習到達度と学び方を振り返り、次時にどのような学び方をするか課題の解決に近づくか考え、それを次時の学習で実践する。これを単元を通して繰り返し、学び方を調整している。

(2) 研究の仮説

- 仮説 1 児童生徒はこれまでの学びを通して得た知識や考え方を授業で活用することで、課題解決に向かうことができるだろう。
- 仮説 2 児童生徒は自分の考えの変化や具体性を自身の学びの成長として実感することで、自ら学ぶ姿勢を育成することができるだろう。
- 仮説 3 児童生徒は次時に必要な学び方を繰り返して考えることで、自分に合った学び方を身に付けることができるだろう。

(3) 研究の手だて

手だて A（仮説 1 に対して）

「前時の学習内容と本時の学習内容のつながりを意識できるような授業構想」

- ・導入時に復習として、既習事項を確認し、本時の学習内容とつながる知識をキーワードとして可視化する。学習課題を提示した後も可視化させておくことで、本時の課題解決の一助となるようにする。

手だて B（仮説 2 に対して）

「自分の学びと他者の学びをつなげる活動」

- ・学習課題に対して初発の考えをもつ場面をつくる。その後、ペアやグループで話し合ったり、タブレット端末を活用したりして、級友の考えに触れ、再度課題に対して考えをまとめる場面を設定する。

手だて C（仮説 3 に対して）

「今の自分の学び方と未来の自分の学び方をつなげる振り返り活動」

- ・自身の学習到達度を 3 段階で自己評価する。自己評価の視点として授業のはじめにルーブリックを示す。その後、なぜそのような自己評価になったかを振り返り、次時に何をどのように学ぶとよいか、継続して取り組みたいことなど学び方の振り返りを記入させ、次時にそれを意識するように声掛けをする。

(4) 仮説の検証方法

- ・仮説 1・2…授業の様子、生徒の記述（ノート等）、振り返りシートの記述分析
- ・仮説 3…振り返りシートの記述分析

3 研究の実践と考察

(1) 実践 1 中学 1 年生 国語「話の構成を工夫しよう」

① 学習課題と指導の力点

○本時の学習課題

「自分の発表を客観的にプロデュースし、聞き手の心を動かす最高の構成を創り上げよう。」

○本時での具体的な手だて

- ・スピーチの構成を考える際に「構成の型（初め・中・終わり）」を意識させ、Google サイトに構成のポイントなど、視覚的に学習した内容を示しておき、いつでも確認できるような学習環境を整えた。（手だて A）
- ・よりよいスピーチ発表にするために、発表練習の様子をタブレット端末で撮影させ、それを基に聞き手の視点から改善点を話し合わせ、発表時の工夫を再考させた。（手だて B）

② 授業の様子

本時はこれまでに作成したスピーチ原稿を基に中間発表を行い、それを客観的に振り返ることで、本番に向けてスピーチを改善していく活動を行った。

導入では、既習事項である「構成の型（初め・中・終わり）」を確認した。また、構成を改善する際のポイントなどを Google サイトで確認してよいことを伝えた。

そして、小グループで中間発表を行い、タブレット端末で互いの姿を録画し合った。その録画映像を個人で視聴することで、「間が短すぎて大切な言葉が流れてしまっている」といった聞き手としての視点から、自身の課題を客観的に分析することができた。グループでの意見交流【写真1】では、「目線が下がっているから、声が届きにくくなっている」などの具体的な改善点を見つけることができた。



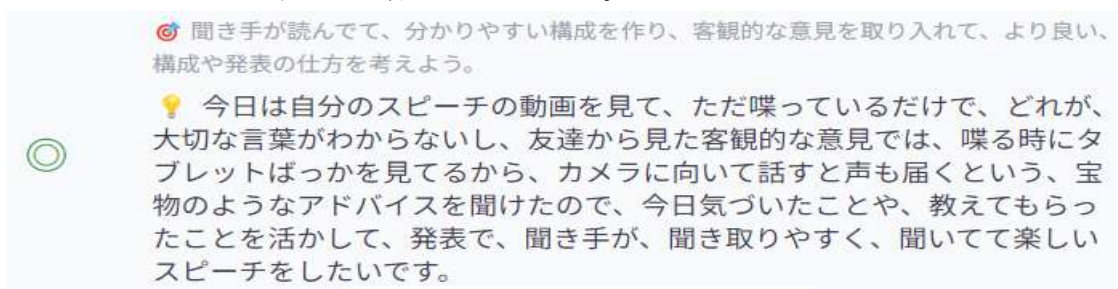
【写真1：改善点を話し合う様子】

その後、個人で発表に向けての改善点を再考させた。生徒はアドバイスを基に「視線を背面黒板の一番上に向ける」と考えることができた。他にも、Googleサイトにまとめられている既習事項を見ながら、再考する生徒もいた【写真2】。



【写真2：既習事項を確認する様子】

最後に、振り返り活動を行った。「聞き手がどう感じるか」を意識して構成や話し方を工夫したと記述する生徒が多くおり、話している動画を観たことで、客観的に自分のスピーチの改善点を振り返っていた。また、グループ交流を振り返り、もらったアドバイスを取り入れて次時のスピーチにつなげたい【写真3】という思いをもつ生徒も多くおり、本時よりも、よいスピーチをしたいという思いを育むことができた。



【写真3：生徒の振り返り】

③ 考察

本実践は研究の仮説①と仮説②に焦点を当て、手だてAと手だてBを講じた。

Googleサイトに既習事項を可視化したことで、生徒が自分のタイミングで今までに学んだことを確認し、学習を進めることができた。また、他者からアドバイスをもらい、自分の思考を改めて整理する際に、既習事項を基準に考えればよいことは、生徒に安心感を与えた。その結果、本時の生徒の姿からも分かるように、課題の解決に向けて、「必要な情報」を得るために個人でタブレット端末を使って学ぶという自ら学び続ける生徒の育成につながったと考える。

また、個人で考えたスピーチの中間発表では、タブレット端末を用いて動画を撮影し、スピーチの改善点を話し合わせたことで、抽象的なアドバイスではなく、客観的事実に基づいたアドバイスを互に行えた。その結果、その後の再構築の時間に、生徒は具体的な改善策を考えることができた。このことから、「個人で考える」→「グループ交流」→「個人で考えるの再構築」という学習過程を組み、根拠や客観的な視点を基に他者と話し合うことは、生徒の自己調整力を高めることにつながるということが分かった。そうした活動を意図的に行うことは、自ら学び続ける生徒を育むために非常に有効であると考えられる。

本実践では、既習事項の可視化や学習過程の工夫によって、生徒が自ら課題の解決に向けて、「必要な情報」を得るために「誰と」（個人、ペア、グループ、教師）「どのように」（教科書、ノート、タブレット端末）学ぶか、学び方を選択することにつながるということが分かった。このように、自分から必要だと思う情報を手に入れる習慣を継続していくことで、自ら学び続けることができる児童生徒の育成につながることができた。

(2) 実践2 小学3年生 算数「3けたのたし算とひき算の筆算」

① 学習課題と指導の力点

○本時の学習課題

「3けたの数の筆算をもとにして、4けたの数の筆算のしかたを考えよう。」

○本時での具体的な手だて

- ・桁数が増えても3けたの筆算の仕方を利用すれば計算が可能であることに気付かせるために、導入で最初に計算する位の確認や、繰り上がり、繰り下がりの方などポイントを押さえて復習をさせた。(手だてA)
- ・単元を通して、授業の始めにその時間に身に付けたい力をルーブリックで示し、個人で目標を立ててから学習を始めさせた。(手だてC)

② 授業の様子

本時は、前時までに学習した3けたの数の筆算の発展として、4けたの数の筆算の仕方を考え、計算する授業である。

導入では、黒板を用いて、既習事項である3けたの筆算の仕方を確認した。最初に計算する位や繰り上がりや繰り下がりが必要な場合があることを確認した。その後、本時の学習課題とルーブリックを提示した。児童はルーブリックが書かれた「カンペキ表」【写真4】の今日の目標レベルに丸を付け、本時の目標を立てた。

【使い方】

①学習のないようを知る。

②もくひょうをききして、学習しよう。

③ふりかえり「何ができたか」「どのくらいできたか」をかくにんする。→できたところに目づけを書きましよう。(「525」など、後からできた日にも書いてOK!) ④次はどこを目標するか、「めあて」をもましよう。

	手に入れた力	レベル1☆☆	レベル2☆☆☆	レベル3☆☆☆☆
1	あらわす力	筆算のしかたを筆算の範囲や数値の範囲に合わせてあらわすことができる。	筆算のしかたを自分であらわすことができる。	筆算のしかたを問題でも自分であらわすことができる。
2	せつめいする力	100の位に繰り上がりがある筆算について、筆算の式を説明することができる。	100の位に繰り上がりがある筆算について、筆算の式を説明することができる。	100の位に繰り上がりがある筆算について、説明問題でも筆算を自分で説明することができる。
3	せつめいする力	1000の位に繰り上がりがある筆算について、筆算の式を説明することができる。	1000の位に繰り上がりがある筆算について、筆算の式を説明することができる。	1000の位に繰り上がりがある筆算について、説明問題でも筆算を自分で説明することができる。

【写真4：目標を明確にしたカンペキ表】

次に、4けたの筆算の問題を示した。すると、児童からは「これもできそう」

「繰り上がりがあるよ」など、今までの学習を想起し、授業に対する前向きな声や学習のヒントになる発言が多数聞こえた。問題を解く前に自分でできそうか挙手をさせると、自分でできそうと答えた児童が21人、できそうだが心配と答えた児童が3人であった。

そして、実際に問題を解き始めると、ほとんどの児童が正しく計算をすることができた。「できそうだが心配」と答えた児童のうち1人は、導入で確認した繰り上がりや繰り下がりの方を確認しながら、自力で解くことができた。また、「これができたらレベル3?」「レベル2はできたと思う」など、カンペキ表に記されたレベルを基に自分の学習達成度を把握している児童もいた。

最後に、導入で立てた個人の目標レベルに到達したか振り返らせた。児童の振り返りには「カンペキ表をやって、自分がどれだけでできているか分かった」「毎回チェックをして、自分のいろいろできていないことが分かるのがよいと思った」などの記述が見られ、自身の学習到達度を振り返ることのよさを実感している様子が見られた。

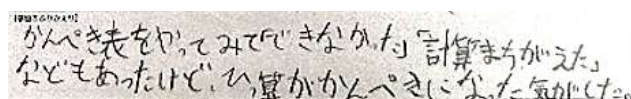
③ 考察

本実践は研究の仮説①と仮説③に焦点を当て、手だてAと手だてCを講じた。

本時では、導入で復習として計算に取り組むだけでなく、教師が意図的に既習内容のポイントを押さえた。そうしたことで、児童は3けたの数の筆算で得た知識・技能は4けたの数の筆算の仕方にもつながっていることを実感し、約9割の児童が「解けそう」「できる気がする」と前向きに学習を進めることができた。このことから、既習事項の確認を通して、児童の課題解決に向かう姿勢を育むことにつながることが分かった。

また、単元を通して、ルーブリックを示し、学習に取り組ませることで、自ら学び続ける児童の育成につながることが二つあった。一つ目は、自身の学習到達度を把握することで、次の目標を児童が自ら立てることにつながることである【写真5】。

二つ目は、単元全体を通した学びの



【写真5：児童の振り返り①】

振り返りができ、児童が自身の成長を実感しやすいことである【写真6】。単元の学習を通して、何を身に付けるかという観点をループ

かそえいどうで字本を見ずにできたけど、答えはおしかりたから次は答えをかんぺきにしたいなと思った。

【写真6：児童の振り返り②】

リックで示すことで、小学校中学年の児童でも「解けた」「解けなかった」という結果だけではなく、「どのようにして解くことができたか」という学びの過程を振り返ることができた。そして学びの足跡を蓄積することで、はじめは数え棒を使っていたが、自力で数え棒を使わずに自信をもって解けるようになったという自身の成長に気付くことができた。

本実践では、既習事項を可視化させておくことで、本時の課題解決の助けになり、児童が前向きに自信をもって課題に取り組む姿につながった。単元を通してループリックを基に学習到達度を振り返ることで学び方を振り返り、単元での自身の成長を実感し、自ら学び続けることができる児童生徒の育成につなげることができた。

(3) 実践3 中学2年生 社会「近世の日本と世界」

① 学習課題と指導の力点

○本時の学習課題

「秀吉は、どのように安定した支配をつくり上げたのだろう」

○本時での具体的な手だて

- ・豊臣秀吉が身分制を確立したことで、全国統一ができたことに気付かせるために、導入で、中世のようす（農民、公家、戦国大名、寺社の勢力が強かったこと）を視覚的に示し、秀吉が築いた支配の仕方と対比させた。（手だてA）
- ・学習課題を提示した後に、初発の考えを書かせ、「追究→交流→考えの再構築」という学習過程を設定し、自身の考えの変容を捉えさせた。（手だてB）
- ・ループリックをA～Cの3段階で示し、学習の見通しをもたせた際に、A評価の基準に「中世と比較して」という視点を入れ、深い学びにつなげられるようにした。（手だてC）

② 授業の様子

本時は、豊臣秀吉の進めた政策がどのように安定した支配をつくり上げることにつながったのかを追究する授業である。

導入では、既習事項である中世のようすを想起させ、幕府以外の勢力が強かったため、不安定な世の中になったことを教師と生徒のやり取りの中で、図を用いて可視化した。その後、学習課題、中世のようすと比較することを意識させるループリックを示し、生徒に本時の学習課題の初発の考えを立てさせた。予想では小学校の既習事項である「刀狩りで武器を取り上げたから」と書く生徒が多かった。

次に、誰とどのように学んでもよいことを伝え、教科書を基に調べ学習を行い、分かったことをノートにまとめさせた。「誰とどのように学ぶか」を生徒に委ねたことで、学習に不安のある生徒も、級友と相談しながら教科書に向き合うことができ、安心感をもって課題に取り組んでいた。また、一人で追究し、疑問に思ったことがあると、途中で級友に声をかけて確認する生徒もいた。さらに社会科の学習が苦手な生徒に分かったことを教える中で、「あれ、これってどういうことだっけ」と自身の知識が曖昧であることに気付き、調べ直しをする生徒もいた。その後、まとめた内容を確認し、最も安定した支配につながったと考えられる理由をキーワードとして生徒にノートの中から選ばせた。その際、前時までのノートを振り返り、中世のようすと比較して考える生徒の姿が見られた【写真7】。そして、ペア→全体の順で意見を交流した後、



【写真7：ノートを振り返る生徒】

再度自分の考えを記入させた。『刀狩』で農民の一揆を防いだけでなく、『太閤検地』を進めたことで、中世で力をもっていた寺社の力が弱くなり、武士の力が強まった」という記述が見られた。

③ 考察

本実践は、研究の仮説①～③に焦点を当て、手だてA～Cを講じた。

成果として、生徒は学習課題に応じて一人で考えたり、友達と相談したりするなど、自分に合った学び方を選択しながら「安心感」をもって、前向きに学習に取り組む姿が見られた。また、既習事項やループリックを手がかりに学習の見通しをもち、他者との対話を通して課題解決を目指そうとする姿が見られた。

一方で、既習事項の確認をする際に時間が想定より多くかかってしまい、追究の時間が短く、他者との対話を通して自分の考えを再構築したり、自ら学び方を調整したりするまでには至らなかった。どの活動に重きを置くかという授業構想や、生徒一人一人が教科の見方・考え方を働かせ、他者との協働を通して考えを深め、学びを自己調整していく教師の支援の工夫が課題である。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

本時の授業内容につながる既習事項を可視化することで、児童生徒はこれまでの学びを通して得た知識や考え方を授業で活用し、課題解決に向かうことができた。既習事項を確認するだけに留まらず、可視化をしたことで、児童生徒が自分の進捗状況に応じて、既習事項を見返し、安心して学習を進めることができていた。このように、誰かから情報を一方的に与えられるだけでなく、既習事項の可視化という手だてを通じて、自分から情報を手に入れる習慣を継続していくことで、学びのつながりを実感し、自ら学び続けることができる児童生徒の育成につながることができた。

また、毎授業、ループリックを示し自己評価をさせたことで、児童生徒がその後の学習に見通しをもって参加することができたり、学習状況を自己評価しながら、次に、「どのように」「どのようなこと」を学ぶとよいかを考えたりすることができた。特に、小学校低・中学年の児童には自分の学びを客観的に評価する視点にもなり、学びの成長を実感するためには有効な手だてであった。単元を通して行うことで、できなかったことができるようになったことを実感したり、学び方の調整をしたりして、自ら学び続ける姿勢を育てることができた。

(2) 今後の課題

学びのつながりを可視化する授業づくりは、自ら学び続けることができる児童生徒の育成に有効であった。

一方で「既習事項の可視化」、「個人で考える→グループ交流→個人で考えの再構築という学習過程」、「ループリックを活用した振り返り」の3つの活動の時間配分をどのように割くかという課題は残った。既習事項の可視化やループリックを活用した振り返りはどちらも個人の思考や成長を実感する手助けとなる。しかし、「学校」という小さな社会には、さまざまな考えをもつ児童生徒がいるため、「自分の学びと他者の学びのつながり」の時間を充実させることで、自分の考えの変化や具体性を自身の学びの成長として実感し、より自ら学ぶ姿勢を育成することができると思う。

また、その際には児童生徒一人一人が教科の見方・考え方を働かせ、他者との協働を通して考えを深め、学びを自己調整していくための教師側の支援の工夫や授業構想の模索をしていく必要があるだろう。